

家族・市民社会・国家

ヘーゲルによれば、人倫は「家族 — 市民社会 — 国家」として弁証法的に表される。

家族は愛情で結ばれた自然の共同体であるが、個人の自覚は薄いままである。家族から子どもが成長すると市民社会の一員となる。この市民社会は、独立した個人の自覚に基づくが、個々人の欲望の衝突があり、争いが絶えず、人と人との結びつきが薄くなった社会である。

この両者を総合した最高の共同体が国家である。国家とは、家族のもつ強い結びつきと、市民社会のもつ個人の独立性という、それぞれの良いところを、ともに生かした共同体である。ヘーゲルは、人間の真の自由は国家の中でこそ実現されるのであり、国家の中で人と人との真の結びつきも回復されると考えた。

最大多数の最大幸福 ～功利主義思想～

近代のイギリスでは、快楽や幸福を生み出すかどうかで行為の善悪を判断する「功利主義」という思想が発展する。その確立者ベンサムは、快楽は単純に量として計算できると考え、「最大多数の最大幸福」というスローガンを説いた。これは、できるだけ多くの人が、できるだけ多くの幸せを得られるよう行動しよう、という意味であり、ベンサムはこの考え方に基づいて、人間社会の道徳や法律はつくられる必要があると考えた。

これに対して、J.S. ミルは、快楽には低級なものと同級なものがあり、単純に量としては計算できないと考え、高級な精神的快楽を求めべきだと説いた。それを表したミルの言葉が、「満足した豚であるよりは、不満足な人間であるほうがよく、満足した愚か者であるよりは、不満足なソクラテスであるほうがよい」というものであり、キリスト教の黄金律である「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」という、ナザレのイエスの教えこそ功利主義の理想だと、ミルは考えた。

Kobavashi ...コラム

純愛をとおした 2人の思想家

近代イギリスを代表する功利主義思想を確立したベンサムとミル…
2人の恋愛のエピソードを紹介します。

ベンサムは33歳で貴婦人のキャロライン・フォックに恋をしますが、気持ちを伝えられずに、20年以上経った57歳のときに結婚を申し込みます。しかし、断られてしまい、84年の生涯を終えるまで独身を通したそうです。

一方、ミルは24歳のとき、ロンドンの実業家テイラー氏の夫人ハリエット・テイラーに恋心を抱き、相思相愛の仲になったそうですが、「いかなる意味でも、彼女の夫に、ひいては彼女自身に汚点をつけるような行為は一切慎む義務がある」と考えて、純愛を貫いたそうです。そしてミルが43歳のとき、夫のテイラー氏が死去すると、その2年後、ようやく2人は結婚します。結婚7年目でハリエットは結核により急死しますが、ミルは、晩年下院議員になって婦人参政権を主張するなど、女性解放に尽力していきます。